準備委員会企画 招待連続講演 2

家族の愛情を問い直す —— カウンセリングの現場から ——

信田さよ子
(原宿カウンセリングセンター)

Questioning the Effect of Family Love: Suggestions from the Frontlines of Counseling

SAYOKO NOBUTA
(HARAJUKU COUNSELING CENTER)

起点としてのアディクション

筆者は長年臨床心理士として心理臨床活動を行ってきた。児童学、心理劇を学び、その後精神科病院、保健所、社会福祉施設などを経て、開業心理相談機関を主たる活動の場として現在に至る。

Table 1 は 2015 年上半期の来談者（クライアント）の主訴一覧である。ここから見てとれるのは精神科医療における診断名とは異なる、「困りごと」を対象としていることである。1995 年設立以来、援助の基本をアディクション・アプローチ（信田, 1999）と呼んできた。アルコール依存症をはじめとするアディクションとは「行動の悪習慣」のことを指すが、その柱は次のとおりである。

1. 本人・家族の区別なし＝誰が病理が深いか、誰が病者かを診断したり見立てるのではなく、主観的に「困っている」人を援助対象とする。

2. 愛情と言われるものの有害性を指摘＝家族は愛情でつながっているという前提を疑い、「～のために」という愛情に満ちた行為が却って問題を悪化させる危険性を指摘する。

3. 「底つき」概念という援助不要論＝援助・ケアという専門家による援助行為が、アディクションにおける底つきを阻害し、結果として回復を妨げていることの指摘。アディクションをやり続けるとさまざまな局面で限界に直面する。それをアルコール依存症の自助グループでは「底つき」と呼んでいる。

4. 当事者グループ（自助グループ）との役割分担＝援助者が時には当事者グループに敗北することがあることを認識する。

このような立場から臨床にかかわり、さまざまな情報を発信することで、年間約 600 名の新規来談者が訪れるようになっていく。中でも近年、虐待や DV（ドメスティック・バイオレンス）といった家族内暴力の加害

Table 1 2015 年（1 月～11 月）原宿カウンセリングセンター来談者主訴一覧

夫婦関係	61	家庭内暴力被害者	8	ギャンブル	7
親子関係	94	家庭内暴力加害者	2	借金・浪費	3
その他の家族関係	8	家庭内暴力心配者	1	PTSD	6
職場の人間関係	7	虐待被害者	3	性被害	4
学校人間関係	4	虐待加害者	4	性加害	2
恋人関係	8	虐待心配者	4	性加害被害心配者	1
その他の人間関係	6	子育ての悩み	6	生き方	10
ED	22	不登校	10	ハラスメント	4
AC	56	引きこもり	7	統合失調症	2
共依存	6	うつ	17	統合失調症以外の精神疾患	6
DV被害者	36	自傷	1	盗癖	6
DV加害者	26	Alcohol	15	その他	27
DV心配者	7	Drug	13	計	510

者・被害者に加えて、各種ハラスメントや性暴力の被害者・加害者の来談も増加しつつある。

アディクションから家族内暴力の注目へ

1970年代からアルコール依存症にかかわってきたが、それは同時に酩酊した夫（時には妻）の妻（夫）や子への暴力とかかわることを意味した。アディクション・依存症への取り組みは暴力への取り組みへ発展せざるを得なかったのである。同様な事態はアメリカにおいても認められる。

ベトナム戦争終結（1975年）の前後、数多くの従軍兵が家族のもとに帰還したが、戦場における彼らのトラウマは薬物・アルコール問題として顕在化し、家族において繰り広げられる暴力につながった。70年代初頭から勃興した第二波フェミニズムの影響もあり、多くのフェミニストたちが中心となった草の根的なDVや性暴力（レイプ）・性虐待の被害者の支援が始まったのである（Herman, 1992 中井訳1996）。1980年に発表されたDSM III（アメリカ精神医学会の精神科診断統計マニュアル第3版）に初めてPTSDが登場したことは、ベトナム戦争退役軍人の精神的後遺症への1つの社会的対応であったことはよく知られている（小西, 1996）。Hermanが、DVや性暴力被害後遺症を複雑性PTSDとして診断名に含めるように主張したのだがそれは適わなかった。このような男性の暴力激化の背景として、アルコール・薬物問題等のアディクション深刻化を挙げなければならない。

2つの言葉の誕生

1970年代末のアメリカにおいて、アルコール依存症の援助者たちが生み出した言葉がアダルト・チルドレン（AC）と共依存である。前者はアルコール依存症である親のもとで育った人たちを指し、後者はアルコール依存症者の配偶者（妻）のことを指していた。ともに診断的客観性を持たず、援助者の名づける必要性から誕生したものであった。

アルコール依存症は統合失調症と同じ疾病でありながら、本人の苦悩に比べるとはるかに家族の苦しみのほうが大きく、援助希求は最初家族から発せられるのが通例であった。アディクションそのものが一種の自己治療（Khantzian & Albanese, 2008 松本訳2013）として発生するために治療動機が低いからである。家族を対象とせざるを得ないことがコメディカルの役割を強化し、狭義の精神科医療における治療の限界を呈したのである。このような背景から、ACと共依存の2語は

誕生した。

DSM IIIによる変化は、操作的診断の広がりと精神科医療におけるプラグマティックな傾向の拡大を生んだ。症状の原因・背景を探求するよりも、横断的で多軸診断を重視することは、精神分析的アプローチの退潮につながった。その一方、新自由主義的な社会的関心の減少と個人化が生まれ、いわゆるポップ・サイコロジーが人々に受け入れられることになった。短絡的でわかりやすい心理学用語の流通と、あらゆる問題を幼少時のトラウマに起因させる風潮も生まれた。本当の自分を見つけ自分を愛することがすべての解決になるという、「社会の心理学化」が顕著となり、その気運に連動して共依存とACが広がったのである。

日本における展開

その動きはアメリカでベストセラー本（Black, 1981 斎藤訳1989）を生み出したが、1989年には日本のアディクション関係者にも共有されるようになり、筆者も1990年代初頭よりACや共依存のグループ・カウンセリングを実施するようになった。

ACの定義は「現在の自分の生きづらさが親との関係に起因すると認めた人」である。もともとはAdult Children of Alcoholicsという、親のアルコール問題が子どもに影響することを明らかにする言葉だったが、日本では機能不全家族という漠然とした言葉とともに広がり、1996年にはいわゆるACブームが起こり、多くの関連本がベストセラーになるという現象も生まれた（西山, 1995; 信田, 1996; 斎藤, 1996）。この背景についての研究的分析はないが、筆者は1995年1月に発生した阪神淡路大震災と3月に起きた地下鉄サリン事件によって、日本社会全体に「被害者」という言葉が共有されたことが大きく影響していると考えている。その一方であらゆる問題の根幹に共依存を指定するという書籍（Beattie, 1986 村山訳1999）も出版された。それほど大きくとりあげられたわけではなかったが、のちに母娘問題に関するキーワードとして再注目されることになる。しかしながら一種の流行とも言える広がりとそのわかりやすきゆえに、二語に対して多くの研究者は距離を置いてきたのも事実である。

2000年に児童虐待防止法（児童虐待の防止等に関する法律）が制定されたが、2015年の今でも、虐待のような特殊な事例以外は親子関係に加害・被害のパラダイムを持ちこむことは少ない。ACが画期的だったのは、90年代初頭にあって、初めて親が子にとって加害者になりうることを示したからである。酔った親からの

暴言暴力を受けたり、父から母へのDVを目撃しながら育った人たちが必死に親を支えて育ち、成人してから特有の生きづらさを抱えるようになることを明らかにしたのだが、この構造はアルコール問題をを超えて、「ふつう」と言われる家族で育った「いい子」の苦しみと共通することが、多くの人たちに共感を呼んだのである。

すでに述べたようにアメリカで誕生した当時から精神科診断の範疇外の言葉であったが、ACは日本において次の3つの流れを生み出した。

1. ナラティブ・セラピーの系譜＝私は私についての物語であるとするナラティブ・セラピー（小森・野村・野口, 1999）は、90年代半ばから注目を集めた。ACの回復は「親の物語から自分の物語を取り戻す」ことであり、繰り返し親との関係を物語ることで生育歴を変化させることを試みる。
2. トラウマサバイバーの系譜＝アメリカにおけるAC論にもっとも忠実であり、本当の自分を取り戻し、トラウマから回復することを目指す。インナーチャイルドという言葉にもつながる流れであり、内閉的かつ個人化促進的とも言える。
3. 近代家族論の系譜＝女性学における研究成果を取り入れ、家族の権力・支配構造とそこから生まれる親の加害者性・子どもの被害者性に注目する。家族愛や絆といった言葉を疑い、親子関係における力の非対称性を強調する。

被害者性と免責性（イノセンス）

以上3つの系譜のうち、筆者は3番目の立場に立っていることは言うまでもない。

ACと自覚・自認した人たちとのカウンセリングを通して、酒に酔って激しく暴力をふるう父よりも、成人してから深く彼女らを苦しめるのはその傍らに居た母親との関係であることを知ることになった。当初それは大きな謎に思えた。誰が聞いてもひどいと判断するだろう父の暴力は、傷つくことはあっても葛藤を生むわけではない。ところが、苦しむ母親は、自分が支えなければ死んでしまうかもしれず、母の唯一の理解者は自分でありその逆も真なりという関係を生きてきた子どもたちは、母親の言葉と期待を深く内面化している。親の期待に添うことで親を支える子どもと、「あなたのために」という愛情の名のもとで支配を行使する母親という組み合わせが徐々に見えてきたのである。

1995年から現在まで、35歳以上である女性のAC

を対象とするグループ・カウンセリングを続けており、彼女たちの言葉を聞いてきたことが、母娘問題を読み解く大きな助けになっている。いわば母娘問題の原点はACという言葉なのであった。

ACとは「親からの被害者性を承認する言葉」であり、言い換えれば「親の加害者性」への告発を包含している。どのように理想的で愛情深い親であったとしても、子どもにとってはいささかの加害者性を帯びずにはいられないとも言える。近年明確になってきたDVの目撃を与える子どもへの影響（春原・武蔵野大学心理臨床センター子ども相談部門, 2011）という視点から見れば、面前DVは心理的虐待であることは言うまでもない。いわばACは成長後にそれを語る人たちであり、過去の虐待の証言者でもあるのだ。

被害者性とは、親との関係性におけるイノセンス（免責性）を承認することでもある。親を選んで生まれたわけではないにもかかわらず、親から暴力を受け、母親の不幸の聞き手となり、結果的に親を情緒的に支え続けるという親子の役割逆転が生じる。親の不幸はすべて自分のせいではないか、すべて自分が悪いのではないかという法外な自責感、あらゆる経験は自分が悪いからだという究極の合理性を生み出し、それによって被虐待的関係を生き延びてきたのである。あらゆることに責任を感じ、いわれもない自責感に苦しんできた人たちにとって、「あなたに責任はない」と伝えられることは、重い荷物をおろしてもいいと言われることなのである。人生の再出発にもつながるイノセンスの承認は、一方で親の加害責任＝親のせいを認めることになる。このようにACという言葉は、美しい家族イメージを転換させ、中でも親子（特に母子）関係の幻想を消滅させることになるだろう。

システム家族論とポジショナリティ

システム家族論にもとづく家族療法は、1980年代以降日本でも大きな影響力をもっている。システムとしてとらえるならば、母娘関係の問題は母が世代境界を侵犯して娘と連合することで、娘が偽物的役割をとっているとして読み解くことができる。しかし、ACをはじめとしてDVなどを、システム家族論で把握することは可能だろうか。Dahrendorf (1958 橋本訳 1973) によれば、システム論は社会均衡モデルであるとし、それに対して自らのモデルを闘争モデルと呼んでいる。家族における親子・夫婦関係に力の不均衡・非対称性を認めるならば、闘争モデルによるアプローチが有効なのではないだろうか。

ACという概念の新しさは、システム家族論的把握ではなく、親子関係が力における非対称性に基づいているとした点である。どれほどよい親であろうと、子どもに対してはいささかの加害者性を帯びるのだ。

システム論はシステムの均衡と統合を目指すのが、ACという概念は親子関係に「愛と絆」に代る、非対称性・権力と支配・加害・被害という視点を投入したのである。

しばしば中立的で客観的立場は、弱者ではなく強者である親に与することになる。親子関係に潜在する権力関係を看過すれば、子どもではなく親の立場に立つことになるのだ。母娘問題も同様に、娘の訴えを客観的・中立的に聞くと、親の心子知らずとつぶやきたくなり、娘が甘えているのだと思うだろう。カウンセリングにおいても、中立ではなく弱者の立場に立つことを心掛けてきたが、母娘問題もどちらの立場に立つかという援助者の立場性 (positionality) が鋭く問われることになる。

墓守娘―母が重い娘たち―

母親からの支配に苦しむ娘たちに関する書『母が重くてたまらない―墓守娘の嘆き―』（信田, 2008）が出版された当時、そのタイトルがどれほどのインパクトを持つかについて予測していたわけではない。むしろカウンセラーとしての経験から当たり前のことを書いたという意識が強かった。

読者の多くはこう語った。「自分のことだと思って怖くてすぐに手に取ることもできなかった」「何度も書店で逡巡した」。また、著者である私へのクレームが出版社に入ったと聞かされた。「あんなひどい本を出していいんですか」という批判を匂わせていたらしい。これらの反応を知ること、母を批判することは日本で大きな抵抗に遭うこと、そして母が重いと言口に出すことすらタブーであったことを再認識した。

母娘と言えば、男性たちからは家族の中で一番仲のいい関係と思われがちだ。女性同士の気安さから旅行やショッピングをともにするため、優良な消費者としてもてはやされる。いわゆる世間の常識もそれに加担して母と娘は仲がいいはずだと疑いもしなかった。父と息子が対立や切断といった言葉とともに語られるのと比べると、大きな違いである。母親と娘の考えや思いがこれほどまでに、絶望的と言えるまでにかけ離れていることをおそく誰も想像できなかったのではないだろうか。家族・親子にまつわる常識の被拘束性ゆえに、娘たちはそう感じる自分に問題があるのではな

いかと思ひ、母が重い、つらいなどと表立って口には出せないできたのである。

アラフォーの娘

同時期に母娘問題を扱った数冊の本（斎藤, 2008; 佐野, 2008）が出版されたことから話題になり、東日本大震災後からは「毒母」「毒親」という言葉とともに様相を少しずつ変えながら現在に至っている。

拙著を読んでカウンセリングに来談する娘たちの年齢は70代から20代まで幅広く、その母たちは90代から40代までこれまた幅広い。しかし2008年当初もっとも鋭く反応したのは、当時アラフォーと呼ばれた世代の女性たちである。出版社をはじめとするマスメディアで働く彼女たちが、自分のこととしてこの問題を発信することで多くの女性の共感を得て、一種のムーブメントと言われる現象につながったのである。コアとなったのはこのようにアラフォーの娘と団塊世代の母親という組み合わせであった。

娘が母親に抱くのは深い罪悪感である。それは、こんな自分でも許してくれた母への罪悪感・申し訳なさではなく、母からの期待に添えなかったこと、呪詛と恨みに満ちた母親を幸せにしてあげられなかったことへの罪悪感なのである。それが重さの一部なのだが、母が重いと言だけでも言おうものなら、人間でなくなるような恐怖に襲われるのである。

外側から見ていると、母親を批判しものしっているかのように誤解されるが、母を幸せにできなかった罪悪感に苛まれていることを理解しなければならない。

団塊世代の女性の挫折

日本の母親像の原型は明治末期の日本が近代国家として体裁を整えたころに、あるべき家族＝近代家族の誕生とともに生まれたとされる（田間, 2001）。良妻賢母や性別役割分業（男は仕事・女は家庭）も大正時代には浸透していたはずだが、当時は女性に参政権すらなかった。団塊世代を中心とした母たちが、戦後民主主義教育の影響を大なり小なり受けている点は、戦中世代である彼女たちの母との大きな相違点である。憲法が謳う基本的人権に基づく男性との対等性や人生選択の自由を、言葉ばかりでなく学校の成績や受験競争を通して身をもって知ったのである。4年制大学進学者は同世代の女性の5%に過ぎなかったが、卒業しても社会の壁は厚く、就職口はほとんどなかった。専業主婦率ももっとも高いのも団塊世代の女性であるとも言われる（天野, 2001）。

一度は自己実現を夢見た彼女たちが、ニューファミリーの幻想にも敗れ、自分と同じジェンダーを背負う娘という存在に何かを託すことはそれほど不思議ではないだろう。娘を通して生き直す、娘に敗者復活の期待を託す、といった隠された母の欲望を多くの娘たちの言葉から知ることができる。

少子化による娘の地位の上昇

多くても3人という子どもの数は、長男相続制度の残滓がなくなったことと相俟って、母の期待が、しだいに息子から娘へとシフトすることを促進した。男女平等の形骸化を体験した彼女たちは、自分の母たちが祖母＝姑との関係で苦しんだ姿を見て育っているのだから、息子とは意識的に距離を取り、結婚したら嫁に不必要なまでに気を遣うのだ。そしてプライドに賭けても、自分がマザコンの息子を育てたと言われたくないのだろう。こうした息子との関係の裏側で、娘に対するあけすけな、まるで解放区であるかのような支配が行使されるのだ。

娘が交際する男性との仲を婉曲に割く母親、ブラジャーを買ってあげない母は、今ではネット上で毒母の1つの典型にすらなっている。このような嫉妬や女性嫌悪に満ちた母の姿は、まるでパンドラの箱を開けたように噴出している。

しかし娘がもっとも混乱するのは、就職までは競争に勝ち残ることが母の期待だったのに、ある年齢（30歳前後）になると暗に結婚を望むことだ。女らしくなくと一言も言わなかった母が、「やっぱり出産しなちゃんね、孫を抱っこしたい」などと言うのである。突然言われた娘は、母の期待の矛盾に股裂き状態に陥る。

しかし母親は、自らの行為をすべて「母の愛」に変換してしまうので、支配・加害の自覚はなく、むしろ娘のためにこれほどまでに尽くしてきたと疑いもなく考えているのだ。

寿命の延長と総子化の時代

アラフォーばかりではない。実は団塊世代の女性も母が重いのである。国勢調査によると、1920年代に50代の女性で親が存命だったのは20%程度だったが、2010年には50.4%になった。持ち親率がここまで上がったということは、親である時間、子である時間がとてつもなく長くなったことを表している。100歳超えも珍しくなくなった現在、娘である時間はかつてなく長くなっている。Figure 1のように、博報堂生活総合研究所はこの現象を『総子化』の時代と呼ん

Figure 1 (博報堂生活総合研究所, 2013, p. 13 より抜粋)

でいる (博報堂生活総合研究所, 2013)。

1970年までは実家の母とほぼ50代で死別していたことがよくわかる。この別離によって母親像は美化され母性愛幻想は維持されたのだ。一方で結婚しても実家との関係が切断されるわけではなかったために、母と娘が切断される契機はなくなった。

団塊世代の女性たちの中には、高齢の母親がいまだに君臨している人もいる。戦後の混乱期を乳飲み子を抱えて生き抜いただけあって、足腰も丈夫だ。幼いころから「お前のために〜した」「世間様は〜だ」「母親を捨てればどんな罰があたるか」などと前近代的言語で強迫されてきた彼女たちは、よき娘でなくなることへの恐怖で身動きがとれない。それでも親が元気なうちは、盆暮れと年2回の接触でなんとか距離を取っていられるが、倒れて介護が必要になると問題が一気に顕在化する。

背中をさすろうとすると手が止まる。母の手を握ろうとするととっさに嫌悪感で身動きできなくなる。直後に襲うのは、そんな行為を取ってしまう激しい自責感である。100歳を超える母親がいまだに自分の罪悪感を刺激する言葉を投げかける。そのたびに2日間も寝込んでしまうという70代の女性もいる。高齢になればなるほど弱者化する母たちは、それと反比例する膨大な権力を手にする。

被害者性の否認によって加害者化する

団塊世代の女性たちは、戦後民主主義教育を受け、核家族で育児書を片手に子育てをした世代である。すでに3歳児神話は彼女たちを席卷していたが、一部には集団保育に期待する動きもあった。ではなぜそのよ

うな母たちがアラフォーの娘にとって重いのだろう。

彼女たちは自らの被害者性を引き受けなかったのではないだろうか。被害者性を自覚することは、必ずしも恨み、呪い、ねたみにつながるわけではない。自分がどのように不当に傷ついてきたかを自覚することは、自分の権利を知り、悼み、苦しむことである。

家族内で女性が被害者であると宣言できたのは、1995年、北京で開催された国連世界女性会議以降DVという言葉が日本に取り入れられてからである。それまでは夫が「手を上げる」と言い換えられ、それも妻が悪いからだとされたのである。2001年のDV防止法（配偶者からの暴力の防止及び被害者保護等に関する法律）制定以後、多くの女性たちには夫からの暴力に耐えるのではなく、逃げたり、警察に通報するといった選択肢ができた。

しかし多くの女性が被害者性を認めないのは、加害者が他ならぬ夫であるからだ。夫は変わらない、しかも別れるわけにはいかないと判断した母たちは、「女は我慢してこそ当たり前」というフォーマットに従っていく。そこに被害者性はない。

他者から被害者性を指摘されても否認する女性が多いのは、認めることは何かを失うことになり、そのあまりの困難さに尻込みするからかもしれない。被害者性を自覚せず引き受けることもない母たちは、娘に対して愚痴をこぼし、あなたのためにここまでやってきたという自己犠牲を誇示し、娘たちに「私のせいで母は苦しんでいる」という罪悪感を惹起する。母を少しでも幸せにしなければならぬと考える娘たちは、母からの期待を先取りした親思いの子どもになるだろう。

その場合の犠牲とは被害者性とは無縁であり、むしろ娘に何もしてあげられなかったという加害者意識を抱かせるための装置に過ぎない。かわいそうで不幸な自己像を娘に注ぎ込む母たちは、娘が幸せになることを実は望まない。自分も耐えてきた現実から娘が抜け出すことを、どこかで妨害するのである。被害者性を引き受けることなく、娘に憑依し、犠牲者である自分を理解させ慰撫させ、母の代理として生きさせることで満たされる。そして自分より幸福になることをやんわりと妨害する。このように、被害者性の否認は加害者化につながると言えよう。

被害者性とミソジニー（女性嫌悪）

被害者の自覚を持たないと述べたが、漠然とした理不尽さは感じており、自分がなぜ女に生まれたのだろうと一度は考えたことがあるだろう。

ミソジニーとは、女性嫌悪もしくは女性蔑視とも訳される（上野, 2010）。もともとは男性たちが根深く抱くミソジニーだが、その対象である女性たちもいつのまにかそれを内面化してしまっているのだ。「女であることの嫌悪」「女に生れて損をした」という女性自身のミソジニーは、同性を差別するという意識や行為につながりやすい。

もっとも身近な同性である娘に向かう事例は多い。ACのグループ・カウンセリングではほぼ全員に共通する経験が、初潮を母に伝えられなかったというものだ。「いやらしい胸をしている」といったわかりやすい表現から、先述のようなブラジャーを決して買い与えないという行為まで、娘の性的成熟を嫌悪する母はミソジニーそのものである。

母として必要なこと

娘から重いと指摘され、時には会うことさえ拒絶される母たちに必要なことはなんだろう。それは繰り返し述べてきた、自らの被害者性の自覚に尽きる。なぜなら被害者の自覚なくして被害者を脱することはできないからだ。被害者性を自覚すれば、加害者（それは個人とは限らない）に目を向けざるを得ないだろう。そこから自分の傷つきや不幸への自覚が生まれ、加害者への怒りが生まれる。自分より弱者である同性の娘への、趣向を凝らした支配を行使することの醜さは、このようなプロセスを経なければ到底自覚することはできない。

それほどまでに、自分の被支配性や被害者性を見つめることは困難である。女性であること、結婚したがゆえに被らざるを得なかった数々の不幸に向きあうことを避けてはならない。それは後ろ向きやマイナス思考として批判されるべきではなく、どれほどみじめであろうと直面しなければならないのだ。安易に娘の人生に入り込み重ね合わせるような人生よりも、自分の不幸に向き合ってこそ、他者としての娘が浮かび上がる。娘が他者性を持つことが、母である自分を否定するわけではない。この1点が理解されないために、多くの母は娘を他者と認めない。

そして、自らの被害者性と向き合うことで、加害者性への気づきが生まれるのだ。この気づきを娘は母に希望するのだが、多くの娘たちがほぼ絶望しあきらめるしかない点でもあるのだが。

父や夫の果たす役割

母の被害者性の自覚が鍵を握ると述べたが、父に責

任はないのだろうか。「僕たち男性にはよくわかりません」という態度は、めんどうなことから手を引きたいことの表れでもある。理解不能という結果に終わるとしても、妻と娘の感じていることを知ろうとする姿勢を示すだけでも娘にとっては助けになるだろう。彼らには、母親と娘の緩衝役として、時には母を制して切断する役割を果たす責任がある。父が機能することで、娘の苦しみはなくならないまでも半減されるだろう。

既婚の女性たちが母との関係に押しつぶされそうなときに、夫の協力と理解が生命線になる。義母からの介入に対して防波堤になり、時間をとって妻の経験に耳を傾ける夫の姿勢によって娘たちはかろうじて持ちこたえることができるのだ。逆説的だが、母たちも、夫に支えられていると感じることで、初めて自らの被害者性が自覚できるのである。母親たちのあの無自覚さと娘への他者性のなさは、幾重にも堆積した深い孤立感の結果かもしれないと思う。

おわりに

母と娘の関係を、依存や自立といった言葉を用いて解析しようとする、本稿の主題は浅薄で単純な構図に帰結してしまうだろう。親離れ・子離れという使い古された言葉がほとんど何も役立たないのと同じである。

心理学や臨床心理学が前提とする親子関係や母親像というものをパラダイム転換しなければ、昨今の母と娘の関係性を読み解くことはできないだろうと考えている。

少子化、長寿化、非婚化、さらに格差社会化といった若者を取り巻く状況の変化は、成人したら親を離れて家を出ていく、中年になったら親と死別して老後を迎える、子どもは親を超える、年齢がきたら結婚して孫が生まれる、という「ふつう」の期待を撤去しなければならぬことを意味している。

カウンセリングに訪れる高齢の親たちは、子どもたちへの金銭的援助が当たり前になっているのである。ACという概念に出会いカウンセリングの経験を通して、3歳であっても子どもはどれほど親を支えているかを知り、親の責任を子どもが肩代わりしているかも知った。家族関係に加害・被害、支配、暴力といった視点を投入しなければ援助が成り立たないという経験も積んだ。

母と娘という新しい主題が登場したことは、子どもが親から解放されるにはどうすればいいのかという問

いかけであり、それに対して援助者として有効な対応が求められる時代が来たということの証左であろう。依存と自立という言葉で親子関係の説明がついた時代は終わった。これからは「離れること」「距離をとること」「関係を断絶すること」をキーワードとすることで、ゆるやかに共存する新しい家族像が描けるようになるだろう。

引用文献

- 天野正子 (2001). 団塊世代・新論—〈関係の自立〉をひらく 有信堂高文社
- Beattie, M. (1986). *Codependent no more: How to stop controlling others and start caring for yourself*. Center City, MN: Hazelden. (ビーティ, M. 村山久美子 (訳) (1999). 共依存症—いつも他人に振りまわされる人たち 講談社)
- Black, C. (1981). *It will never happen to me!* New York: Ballantine Books. (ブラック, C. 斉藤 学 (監訳) (1989). 私は親のようにはいらない—アルコールの子供たち 誠心書房)
- Dahrendorf, R. (1958). *Homo sociologicus. Ein Versuch zur Geschichte, Bedeutung und. Kritik der Kategorie der sozialen Rolle*. Köln: Westdeutscher Verlag. (ダーレンドルフ, R. 橋本和幸 (訳) (1973). ホモ・ソシオロジクス—役割と自由 ミネルヴァ書房)
- 博報堂生活総合研究所 (2013). 生活動力 2013 総子化 博報堂
- 春原由紀・武蔵野大学心理臨床センター子ども相談部門 (2011). 子ども虐待としてのDV—母親と子どもへの心理臨床的援助のために 星和書店
- Herman, J. L. (1997). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (ハーマン, J. L. 中井久夫 (訳) (1999). 心的外傷と回復 増補版 みすず書房)
- Khantzian, E. J., & Albanese, M. J. (2008). *Understanding addiction as self-medication: Finding hope behind the pain*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers. (カンツィアン, E. J.・アルバニーズ, M. J. 松本俊彦 (訳) (2013). 人はなぜ依存症になるのか—自己治療としてのアディクション 星和書店)
- 小森康永・野口裕二・野村直樹 (1999). ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社
- 小西聖子 (1999). 解説 (ハーマン, J. L. 中井久

- 夫（訳） 心的外傷と回復 増補版（pp. 381-386）
みすず書房）
- 西山 明（1995）. アダルト・チルドレン—自信はないけど、生きていく 三五館
- 信田さよ子（1996）. 「アダルト・チルドレン」完全理解—一人ひとり楽にいこう 三五館
- 信田さよ子（1999）. アディクションアプローチもうひとつの家族援助論 医学書院
- 信田さよ子（2008）. 母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き 春秋社
- 斎藤 学（1996）. アダルト・チルドレンと家族—心のなかの子どもを癒す 学陽書房
- 斎藤 環（2008）. 母は娘の人生を支配する—なぜ「母殺し」は難しいのか NHK 出版
- 佐野洋子（2008）. シズコさん 新潮社
- 田間泰子（2001）. 母性愛という制度—子殺しと中絶のポリティクス 勁草書房
- 上野千鶴子（2010）. 女ざらい—ニッポンのミソジニー 紀伊国屋書店